

私のおすすめ

Movie VII

高橋泰英

高橋皮膚科クリニック（横浜市中区）

昨年も新型コロナウイルス感染症のため映画館に足を運ぶ回数が少なかったのですが、その中でもおすすめ映画はかなりありました。今年は珍しく、邦画におすすめが多くあります。

『チャサンオボ』

朝鮮王朝時代の海洋生物学書『チャサンオボ』の誕生譚。キリスト教徒のため流刑となった学者が、海の生物に詳しい島の青年に触発されて学術書を書くことになり、青年も学者に触発されて学問をすることになります。互いに師弟関係になりますが、やがて……。カラー映画に比べて光の濃淡を強く感じる、全編モノクロームの画面の美しいこと!! 去年のダントツナンバーワンでした。ごく少数の映画館でしか上映されていなかったため、DVDなどになるかが心配です。

『ノマドランド』

ノマドは遊牧民や放浪者を指すフランス語が語源。リーマンショックで家を失った女性が、アマゾンの臨時雇いなどで働きながらキャンピングカーで放浪生活を始めます。登場人物はフランシス・マクドーマンドとデヴィッド・ストラザーン以外実際にノマド生活をしている人達なので、ある意味ドキュメンタリー映画です。とても地味な作品ですが、全く退屈せずに観ているうちに、この世界で自分が暮らしている感覚になりました。この生活が自由なのか惨めなのか? ……よく分かりません。ロードムービーには名作が多いですね。人間は移動する動物だから心に響くのでしょうか。

『ファーザー』

認知症の老人を演じるアンソニー・ホプキンスの演技を観る映画。ちょっとサスペンスタッチ。『女王陛下のお気に入り』のオリヴィア・コールマンも相変わらず上手いです。

『ジェントルメン』

『ロック、ストック&トゥー・スモーキング・バレルズ』という傑作コメディタッチ・クライムムービーで世に出たガイ・リッチー監督の新作。以前このコラムで紹介した『コードネームU.N.C.L.E.』『アラジン』も彼の監督作です。そちらはハリウッド臭が強かったのに対して、これは原点回帰したイギリス臭い映画です。大麻売買にまつわる悪い奴らのドタバタサスペンスで登場人物多数ですが、うまく整理されているので多分戸惑うことはないでしょう。『ロック…』ファンから「待ってました!」という声が出そう（私は心の中で出しました）。『ロック…』に比べて有名な俳優が多く出ており、それぞれアクの強い役を楽しそうにやっているのが印象的。

『イン・ザ・ハイツ』

ヒスパニック系アメリカ人によるミュージカル。ニューヨークに暮らす4人の若者の夢とその周辺の人々の暮らしを描く。基本的にミュージカルは嫌いです。それは不自然に台詞を曲に乗せるからだと思いますが、曲はラップ調が多いので元々そういうものとしてあまり違和感がありませんでした。踊りもインド映画を思わせる色彩の洪水と圧倒的迫力で、「嫌とは言わせないぜ」という感じ。本当は映画館の大画面・大音量で体感していただきたかった。

『キネマの神様』

山田洋次監督のヒューマンコメディ。映画監督を志していたがアクシデントにより断念した男の現在と過去。過去は菅田将暉、現在は故志村けんの予定でしたが急遽沢田研二が代役を務めました。どちらも心に沁みる演技でしたが、沢田研二に志村けんが重なって見えて、涙が滲んで仕方ありませんでした。ある意味二重に楽しめたともいえます。

『サマー・オブ・ソウル（あるいは、革命がテレビ放映されなかった時）』

ウッドストックと同じ1969年夏に開催されたソウルフェスティバルのドキュメンタリー。こちらは全く知りませんでした。マヘリア・ジャクソン、ニーナ・シモン、スティービー・ワンダーなど錚々たる顔ぶれが出演。ほとんどはブルースやゴスペルをベースとした、怒りや悲しみを強く訴えている音楽なのがよく分かります。個人的にはフィフス・ディメンションの「アクエリアス」でその時代に戻りました。彼らだけ白人の音楽という感じで異質です。印象的だったのはスライ&ザ・ファミリー・ストーン。とても有名なバンドですが、当時あまり好きではありませんでした。今聞くととても斬新で別の意味で他のアーティストとは異質です。それにメンバーに2人も白人がいたのが驚き。しかもドラム。ソウルのリズムは黒人特有というのは偏見だった？

単純なドキュメンタリーに終わらなかったのは、当時の観衆に現在インタビューしている点です。少年時代にマリリン・マッカーを女神としてあがめていたオヤジの話が特に良かった。

『リスペクト』

ソウルの女王アレサ・フランクリンの伝記映画。主演は『ドリームガールズ』で抜群の歌唱力を見せつけたジェニファー・ハドソン。アレサの前半生はかなりスゴイです。ミュージシャンで問題を抱えていない人はいなかったのかと思うくらい、この手の伝記映画は陰の部分が多く描かれます。まあ順風満帆な人の人生は、誰も見たくないでしょうね。ところでエンドロールでアレサ本人の晩年（振袖のような上腕はかなりの歳だと思います）のステージが流れます。それまで素晴らしいと思っていたジェニファーの歌声が、完全に霞んでしまいました。恐るべし、女王!!

『ユダ&ブラック・メシア 裏切りの代償』

ブラックパンサー党のカリスマ的指導者の暗殺事件を、FBIから送り込まれた内通者の側から描いたサスペンス。最近この時代を描いた作品をいくつか見っていますが、内通者の視点から見ているのでとてもリアルです。香港映画の傑作『インファナル・アフェア』もそうですが、組織の潜入者の話は心が痛くなります。ところでこれが日本では劇場公開されなかったそうです。嘆かわしいです。

『浅草キッド』

ビートたけしの自伝の映画化。劇団ひとりが監督・脚本、見事です。師匠の深見千三郎を大泉洋、若きたけしを柳楽優弥が演じています。大泉の演技は大袈裟で好きではありませんでしたが、これはかっこつけたがりの喜劇俳優という役なので見事に嵌りました。14歳でカンヌ国際映画祭男優賞を受賞した柳楽は、その後今一つだったと思いますが、これは代表作になるでしょう。

『罪の声』

「グリコ森永事件」がモチーフ。偶然自分の声が録音されたテープを発見し、それが脅迫事件に使われたのを知った当事者と、未解決事件を追う新聞記者が謎を解明していきます。事件に関係した多くの人の人生が、短い時間の中でリアルに立ち上ってきて息が詰まりそうになります。今、普通の人を演じて星野源の右に出る人は少ないかもしれません。

『ヤクザと家族 The Family』

現代のヤクザを、弱者という視点で描いた映画です。前半は古き良き(?)家族としてのヤクザの世界と、昔ながらの抗争を繰り広げるヤクザの世界が描かれます。遅まきながら『緋牡丹博徒』『仁義なき戦い』などの任侠映画、ヤクザ映画に興味が出てきた私は、そういう映画にノスタルジーを感じる監督が作ったのかと思いました。しかし後半はガラッと趣が変わります。やさぐれて暴力的で哀愁を漂わせる男は綾野剛の独壇場ですね。

『悪人伝』

やくざの組長と暴力刑事が組んで、無差別連続殺人鬼を追い詰めていきます。韓国のバイオレンスアクションはすさまじいのですが、必ずどこかにユーモラスな場面が挿入されるので箸休めとして効果的です。主演のマ・ドンソクは体も顔も迫力満点。この人が出ている映画は、つい見てしまいます。

『アンモナイトの目覚め』

メアリーは本来なら一流の古生物学者になるはずが、女性の地位の低い時代に化石を土産物として売って暮らしています。シャーロットは横暴な化石収集家の夫の仕打ちから鬱状態になっています。あるきっかけから2人が次第に惹かれ合っていく様が、抒情たっぷりに描かれます。ケイト・ウィンスレットは『タイタニック』以外いつも素晴らしい(『タイタニック』ファンは激怒?)。ここでは非常に寡黙で感情を表さない女性の、内に秘めた激情を冷演(熱演の逆なので造語してみました)。シアーシャ・ローナンは若手ナンバーワンの演技力と美貌の持ち主とっていますが、ここでもその両方を遺憾なく発揮しています。2人の絡みは美しさとエロチシズムがしっかり両立していて理想的。こういう場面で「猥褻感がなくて良かった」というバカがいますが、「このケーキ甘くなくて美味しい」というのと同じ愚かな発言です。

